

目次

はじめに なぜいま石原純か

第1部 物理学者への道 ..... 1

1 小・中学校時代 2

父・量と母・千勢のこと／本郷小学校時代／郁文館中学時代／なぜ理科を

2 第一高等学校時代 10

第一高等学校入学／第一高等学校時代の日記／再び、なぜ理科をそして物  
理を

3 理論物理学科へ 20

物理学科志望／理論物理学科へ／当時（一九〇〇年頃）の物理学／当時の理  
論物理学科

4 物理も歌も 28

作歌の試み／散歩とテニス／物理も歌も

- 5 父の死 37  
桑木彥雄、山形聯隊へ／父・石原量の死／ニュートン祭
- 6 理論物理学科卒業 47  
ニュートン祭記事／『馬酔木』時代の歌／理論物理学科卒業
- 7 大学院時代 57  
当時の物理学教室／一週間のスケジュール／長岡研でのゼミ——ボルツマン、ギブス／物理談話会——シュタルク／執筆活動／田丸節郎との交流

第2部 日本初の理論物理学者誕生……………67

- 8 理論物理学者として自立する 68  
長岡半太郎と石原／桑木彥雄の影響
- 9 最初の相対論に関する論文 79  
一九世紀終わりの物理学／『美しき光波』の内容／『美しき光波』と相対論／最初の論文「運動媒質の光学」
- 10 陸軍砲工学校時代 89  
京都の水野・玉城による相対論研究／京都グループと石原／砲工学校時代の石原の相対論研究／砲工学校時代の石原の生活

- 11 金属電子論の研究 98  
金属電子論——最先端の物理分野／石原の金属電子論の研究／仙台へ
- 12 東北帝国大学へ、そして最初の量子論研究 105  
東北帝国大学創立と初期の物理教室／最初の量子論研究／石原の量子論／都を思ふ
- 13 ヨーロッパ留学前の相対論研究 115  
『東北数学雑誌』論文と相対論の総説／桑木彥雄の役割／量子論の導入／仙台を発つ

第3部

ヨーロッパ留学から  
東北帝国大学教授辞任まで……………125

- 14 ヨーロッパ留学——ドイツへ 126  
シベリア経由／モスコーに一泊／ひとまずベルリンで／ミュンヘンへ
- 15 ヨーロッパ留学——ミュンヘンとベルリン 135  
ミュンヘンでの勉学／ミュンヘン——ミュンスター——ベルリン／ベルリンでの勉学
- 16 ヨーロッパ留学——チューリヒ、ロンドン、そして帰国 145  
チューリヒ——アインシュタインのもとで／ロンドンで——ボア理論を知る／パリ、ベルリンを経て帰路に

- 17 留学中・留学後の相対論研究 155  
 「留学中の研究／帰国後の研究／「実験室の夏」」
- 18 一般化量子条件とその周辺 162  
 留学中の量子論研究／石原の一般化量子条件／原子スペクトル、特性X線スペクトルへの関心／「仙台歌会の記」
- 19 帝国大学教授を辞任する 172  
 石原に会うまでの原阿佐緒／一九一九年、帝国学士院恩賜賞を受賞／休職そして千葉県保田へ

第4部 科学ジャーナリストとして……………181

- 20 科学ジャーナリストへの転身 182  
 石原と改造社／石原と岩波書店／文筆で生きる
- 21 『相対性原理』と『アインシュタイン教授講演録』 191  
 『相対性原理』／『アインシュタイン教授講演録』／「京都講演」
- 22 現代物理学の普及活動 198  
 『アインシュタイン全集』／『物理学の基礎的諸問題 第一輯・第二輯』／石原と矢島祐利

- 23 『岩波講座 物理学及び化学』刊行と雑誌『科学』の創刊 208  
 『岩波講座 物理学及び化学』／『科学』の創刊／戦時体制下の『科学』、寺田寅彦の死
- 24 『岩波 理化学辞典』の刊行 219  
 『理化学辞典』刊行まで／石原の役割／『理化学辞典』の効用／『理化学辞典』の典拠
- 25 科学論的考察へ 230  
 石原↓桑木書簡／マッハー・プランク論争／桑木対石原／科学論関係の著作

第5部

戦時科学振興政策批判から  
 敗戦直後の急逝まで……………241

- 26 ファシズムに抗して 242  
 「時局匡救と科学」／『科学』巻頭言にみる石原の発言／田辺元、小倉金之助との連係
- 27 戦時科学振興政策を批判する 252  
 科学動員計画を批判する／科学振興のかけ声のなかで／「米英との開戦に際して」
- 28 科学的精神と科学教育論 263

科学教育における科学的精神／「科学教育の原理的認識」／大学教育について／科学的精神を養成するには

274

志半ばに——敗戦直後のよびかけ  
戦争中の執筆制限／敗戦直後の『科学』巻頭言／交通事故／追悼文／「科学と芸術」

おわりに

283

文献と注

参考文献

石原純略年譜

索引

\*「」内は本書著者注。

\*引用文の漢字は、原則として新字体に改め、読みやすさに配慮して句読点、濁点を補った。

また、明らかな誤りは正した。